

中国のほんの話(72)

吉川幸次郎 梅原猛 『詩と永遠』

～ 詩とは何か、日本語と中国語 ～

蔭山達弥



わが国における中国文学研究の泰斗、吉川幸次郎は彼よりも二十歳年下の哲学者、梅原猛との対話の中で、中国の詩の特徴について次のように述べている。

「中国の詩というのは、平均して言えば、じつはいまぼくがいった詩の理想とはちょっとちがって、じつは大いに散文的な要素をもっていると思うのです。だいたい中国の詩に叙事詩(民族や国民の運命に関係する戦争や事件を特に、英雄の行動を中心にありのままに述べた詩)があまりないということは、想像力をはたらかせるのじゃなしに、日常の生活について生まれる感情を叙述するのが中国の詩の任務だということです。だからそれは、われわれ人間をとりまく不可解なものをどうしようというよりも、なにか解しうるものの韻文による叙述、平均してはそういう面に、より多くじつは傾くのじゃないかと思います。西洋の詩は、常に日常とは少しちがった世界のなにか不可解なもの、その表象であろうとする場合が多いのじゃないでしょうか。…」(『詩と永遠』雄渾社、1967)

詩とは心に感じたことを、一定のひびきをもったことばで、リズムを持たせて表した文である。詩は、短歌や俳句などと同様、きまったリズムによる表現効果を目的とする文章であり、韻文の範疇に入り、定型や韻律にとらわれないで書かれたふつうの文章である散文とは相反する。だが、中国の詩には詩と対極にある散文的な要素があると吉川は言う。

中国の古典である漢詩、特に定型詩には、一句の字数、一首の句数、押韻(脚韻)、平仄という漢字のイントネーションによる字の並び方の決まりがあり、日本語に訳してしまうと、中国語特有のひびき、リズムが失われてしまうのではないかと、筆者は常日頃思うのである。以前このページで取り上げた井伏鱒二の『厄除け詩集』のように思い切って七五調に意識してしまう方法もあるが、それでは原詩を下敷きにした別作品のように思ってしまうのは筆者だけだろうか。

海を一つ隔てた隣国同士でありながら、日本語と中国語の感覚の違いについて、吉川は梅原との対話で、さらに次のように的確に指摘している。

「抽象ということですが、中国語というものは、ものの頂点だけをぼんぼんという言葉ですよ。‘ぼくが**行**きます’というふうな、そんなめ

んどくさいことは言わぬ言語だ。日本語は、‘**ぼくが**’ということではくを主張させ、‘**行きます**’ということで行く状態をはっきりさせる。その必要がないときまで、そう言わなければならぬ。それにたいして中国語は、‘我行’だ。‘我去’だ。未来の‘行きましょう’でもやはり‘我行’だ。ほんとうにものの頂点だけを指摘する言葉なんです。(中略) だいいち、中国語は長いセンテンスをつくることは困難です。日本語は、いくらでも長いものをつくりうる。」

従って、筆者は中国の詩、特に漢詩は原詩に忠実な発音で朗読することが作品を理解するうえで不可欠だと思うのである。もちろん使用されている語句の意味、作品の背景、作者の経歴などを理解することも大切であるけれども。著名な学者、散文家である朱自清も著書『論雅俗共賞』の中で「筆者(朱自清)の考えでは、詩文は主として声調(イントネーション)に頼り、小説は主としてストーリーに頼る。これまで普通の読者は大抵が吟することができ、彼らは詩文を吟詠し、その吟じた声調、吟じたメロディーから面白みや快感を得て、意味のことは重視せず、字面が分かりさえすれば、全体の意味がはっきりしなくてもどうってことないのだ。」(『鑑賞文庫』人民文学出版社1984所収)と述べているのではないか。さらに現代文学における著名な詩人、聞一多も『詩と批評』の中でこう述べている。「詩とは何かという問題について、二つの対立する主張がある。ある人は、詩は責任を負わない宣伝だと考える。またある人は、詩は美の言語だと考える。我々が一篇の詩を朗読する時、無駄骨にはきつとまらない。良い詩でありさえすれば、我々は朗読後、彼の影響を受ける。詩人の作品における人生に対する見方は我々に影響を与え、人生に対する態度は我々に影響を与える、我々は彼の宣伝を受け入れたのだ。」(『鑑賞文庫』所収)

かげやま たつや(非常勤講師・中国文学)